

硝子の広場

草部 和子

硝子の

広場



昭和36年3月25日初版発行

著者 草部和子

発行者 西村俊成

印刷所 株式会社文弘社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 東都書房

東京都文京区音羽町3ノ19

電話・大塚(941)3121 振替・東京72732

.....
乱丁・落丁本は、おとりかえします。
.....

© K・KUSABE 1961

硝子の広場

装
幀

直
木
久
蓉

佐藤峯子は、友人たちのなかに、大村静夫を意識すると、自分の心と身体が何かのものを求め、同時に何かを避けようと、激しく争いあうことを感じた。自身とちがった何かのものの、自分のものである筈の心と身体が傾きをみせて、親近感を露わにしてゆく。この矛盾した自身の傾斜を、どうしたらいいのだろう。と峯子は小さな吐息をついて、大学ノートの上に視線を落した。

横罫にそって、細かな文字が書きこまれている報告ノートが、屋外の木の茂みを映して青かった。この緑の色調は、ノートの上ばかりではなく、仄暗い国文研究室のすべてのものにしみとおってゆくのだ、と峯子は感じた。屋外の青葉の色が、研究室の白い壁にうすい緑の光線を

照り返し、窓ぎわに置かれた教授用デスクと回転椅子や、硝子張りの本棚や、鈍色に光るひろいテーブルや、そこに集まって研究会をもっている青年たちの、顔やワイシャツや腕を緑色に染めて、室内のすべてのものを水底のような光線に揺らめかした。ここは、夏の近い太陽の真下にかくされている、静寂の場所だ。この研究室の仄暗い緑の色調は、そのまま私のものなのだ、と峯子は思った。心と身体の間には、燃え立つような情感がある。しかし私はそれに逆らい続け、逆らうということに何かの不満を感じながら、逆らいの道を突走る。……峯子は、鈍い苛立ちをふりはらうように、言葉を続けた。

「つまりそれは、明確に反動的ともいえないものなのでしょう。……森鷗外の女性意識って、ロマンチズムの領域を出ないものではないかと、私は思うのです。一定の限界ある、進歩主義とでもいうのでしょうか。」

大テーブルの中間のところで、森鷗外の女性観が「反動的」なものではないのか、と質問した同級の真島に向かって、彼女は答えようとしていた。真島は級友たちから万年シンパと呼ばれ、常に学生運動や Kommunismus に間隔を保ちながら、必ず大衆行動には参加して、「反動」とか「反革命」というような言葉を好んでつかう青年であった。そうしたワルトラな表現

をつかうことで、彼は、ひそかに革命への憧憬を満足させていたのであった。峯子は、鷗外の女性観が「反動的」ではないか、というような彼の表現に恥ずかしさを感じていたが、別の自分の言葉が見当らないために、彼の表現をかりて答えていた。だが心の顔は真島には向かず、自分の右脇に坐っている、司会の大村静夫に向けられていることを感じていた。大村静夫。――彼から流れ出るあるものの波動が、心のなかに滲透してゆく。紺のネクタイをしめている胸、さらさらと油気なくかき上げた髪、かたく鉛筆をにぎってメモをとる動作、それらのものから、小刻みに送り出される大村静夫の存在の波動が、心のなかに伝わってくる。それは透明な白い光のようだ。と峯子は思った。――すべてのことが決まりをもたない、学生たちの研究会のために、今日も、鷗外の『雁』の報告が始まる直前になって、司会者を決めようと小さなトラブルがもち上がった。君はどうかね。いや駄目だ。作品を読んでこなかった。僕もちょっと。と押問答の果に、研究会委員の一人の大村静夫が、「じゃあ僕がやりましょう。」と口重く引きうけたのだ。大村静夫が司会を引きうけてくれた。それも軽く承諾したのではなく、気乗りのしない、にがい表情で引きうけてくれた。そして司会に決まってからは、確実な動作と口調で一同を着席させ、自分は私の脇にきて坐った。それらのことが行われた過程に、恥ずか

しさとも快さとも不明のものに揺すぶられた。彼から伝わってくるかすかな光の波動を感じ、次第に身動きならなくなった。そのために逆に、何かのものを回避しようとする思いに駆られてゆくのだ。……峯子は、自身のうちに居心地悪さを感じながら、また言葉を続けた。

「森鷗外には、明治最高の知識人であるという自負があつて、そういうところから割り出された、観念的な女性理解があつたのではないでしょうか。私が、さっき『雁』のお玉が、ロマンチズムに基く女性像にすぎない、といったのもそのためです。そうした進歩的思考から、当時の女性の自我確立の動きにも関心を示しているし、『青鞥』や『番紅花』^{サフラン}など、婦人のつくった雑誌も援助していますし。そうした、知識人としての啓蒙主義のようなものが、あつたのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。」

峯子は言葉をきって、真島の答を待った。しかし、真島はオールバックの頭を二、三度ふかくうなずかせたきり、自分のノートの上にうつむきこんで答えなかった。そのため峯子の言葉は、二十名ばかりの青年たちの、とりどりのポーズの上でふと途絶えた。その言葉は、肘をついて頭をかかえるものや、腕組をして壁の一点を凝視するものや、本のページをむやみにめくるものや、そうしたバントマイムの姿の上で、一瞬反響を失った。峯子はその友人たちの沈

黙に、やりきれないものを感じた。私は、大村静夫の存在を意識すると、主張が限りなく勇ましくなり、多弁になってゆくことを、制止できない。と彼女は思った。このような私は私ではない。だが、徐々に高まってゆく、情感の横溢から逃げようとして、思かしく胸をそらす。過去の記憶の上につみかさなる自己嫌悪が、こうした擬態をつくるのであろうか。

「議長！」

その時、不意にひとつの声が、峯子の思考と室内の沈黙をさえぎった。その声は、左の窓に近い教授用デスクから起った。独りでそこに坐っていた青山三郎が、握りこぶしをつくって挙手していた。

「議長！ 発言を希望します。」

彼の腕は、ワイシャツをたくし上げているために、むき出しで、日焼けして逞しい。研究室に、場ちがいな粗野な空気が立ちこめて、学生たちが軽いざわめきをあげた。

大村静夫が、答えた。

「よせよ、議長なんて。僕は司会者だよ。——だが、話し給え。」

青山は、靴を鳴らして立ち上がった。

「佐藤君！ 何ともこれは、あかん。俺は、いつかいおうと思つとったよ。あんた、どうも、あかんがな！」

あかんがな、って。……峯子は、青山の異様に光る眼ざしを一瞥し、不快を感じて視線を落した。あかん、というのは、いけないという意味の方言だが、彼がつかうと、何と嫌味に響くのだろう、と峯子は思った。青山三郎が学生運動をしていることは、何かのまちがいではないだろうか。彼のいうことなど、きかない前から、大かた想像がついている。彼が、先刻ぬうつと、独りおくれて研究室に入ってきた、その時から。

「あんたのいう、近代女性の自我の何とか、女の自覚がどうしたとか、そういう思想があかんのだな！ あんた、徹底的に自己批判する必要があるぞ。佐藤君はいつだったか、『あたしは、どうも都会育ちで、お百姓なんかできないわ』といったが、そういうあんたに問題がある！ 佐藤君はお嬢さんだ。日本の女の典型など知っておらん。農村の女を見てみなさい。自分で夫を選び、嫁入りするなど思いもよらぬ。日本の女は、みな泣きの涙で嫁入りし、家のため夫のため子供のため、身を粉にして働くのです。その現実を無視して、何が女性の解放であるか！」

「ね、待って下さい。私のここで報告したことで、それが、どうつながるのですか。私のいったことは……」

青山はさえぎった。

「いや！ 佐藤君には、真の女の偉大さはわからないのだ。日本の女は、惨めな生活のなかで、妻となり母となり、老いてゆく。日本の夜明は女の忍従にある。母の献身にある。それを佐藤君はわかっておらん。全くわかっておらんのだな。」

大村静夫が、鉛筆をもった右手を上げて、笑いを義務的にこらえているような、苦しい表情で青山を制した。

「ちょっと、君のいうことは、お玉さんの肯定的評価か何かなのか。どうも変だな。佐藤さんは『雁』の作品論のなかで、お玉が高利貸の妾という立場に、少しもためらわずに、大学生の岡田との恋に生きようとするのは、自己省察に欠けた行為だから、自覚以前のものであり、お玉のなかに、近代女性の自我確立などを見ることはできない。と否定的に評価された訳で、また、今の真島君の質問に対して、鵬外の女性観の、進歩性と限界についてのべられたのが。——そうした佐藤さんの主張に、具体的にそう形で、批判を出してもらいたいものだ。」

「いや、いや。俺のは、もっとぶかい原則論じゃよ。原則的批判として、これをいっとるのだ。」

「しかし、君がいくら原則的批判だといっても、僕らにはさっぱりわからないな。もう少し、筋道を立てて喋ってもらいたいものだが。」

大村静夫は、この場の空気を收拾しようと計りながら、一方、青山をかばってやらねばならない、自分の立場に皮肉を感じた。研究室のなかに、またざわめきが起った。

「君、ついさっき、入ってこられたのでしよう。途中からの発言は混乱を招きますよ。」

と、真島が生真面目に抗議すると、その隣席で、丸い顔に眼鏡をかけた山之辺が、遠慮とからかいが半ばする声で、つけ加えた。

「そうですな。文学論として展開してもらいたいのです。」

「何だと！」

青山は向き直った。

「原則が正しくなくて、何が文学論であろう！ 俺は、この佐藤君の思想を、徹底的に自己批判してもらいたい、と思ったんだ。それを、諸君は正しいというのか。そういうものを、支持

しようというのか。実に心外だぞ。」

青山は、声のした方角をにらみ渡し、そして続けた。

「大体、諸君はまちがっておる。諸君は、近代文研などというものをつくり、鷗外だ、漱石だ、といっておるが、そんなものは、書齋派の教授にでも任しておけばよい。我々にとっては、生きた現実こそが学問である！」

大村静夫は青山の発言を止められず、また、控えめな司会の立場に拘束されて、考えていた。まずい発言をするものだ。青山は、大会などでアジるのは得意だが、それとの区別がつかぬのだろうか。通常は無口な彼だが、一度喋り出すと、止まるところがなくなってしまう。妙に赤い顔をしているが、アルコールでも入っているのだろうか。困ったことだ。彼は極端な「大衆路線」の信奉者だ。農村出身で、自己の体験を重視して、すべてをそれで論断する。農村問題は重要だが、彼のようにそれだけを至上とし、素朴な実感論をふりまわすのは、たまらない。また、この種の政治的文学論を、ここで行うことも適当ではない。青山は、この会を妨害する意志があるのだろうか。つい昨日の細胞会議で、学生が学問研究を行うなかで、着実に運動を押しすすめることの必要が、討議されたばかりだというのに。そのため、常には不勉強

な青山が、研究会に出席したのかと思ったのだが。とにかく、まずいことだ。と静夫は思い続けた。

ひと月ほど前の、メーデー事件の起った五月一日、近代文研の学生たちは、大半が広場までいつている。佐藤峯子は、神宮外苑で帰ったようだったが、他の学生は殆ど全員が、日比谷公園まで行進し、更に「人民広場」にいったのだ。あの勉強家の真島が、メーデーの翌日、大学で僕を捉えて昂奮していった。「ひどいですね、朝刊を見ましたか。デモ隊、暴徒と化す、とは何ごとですか。暴力をふるったのは警官の方ですよ。僕らは何もしなかった。メーデーに参加して、僕は初めて、ブルジョア新聞の虚偽を知ることができましたよ。」——彼らは、共産党員ではない。しかし、不正についての厳しい批判をもち、歴史の前進に、歩調をあわせようとしている青年たちなのだ。そのために、僕も、また青山にしても、この研究会に参加して、共に行動しようとしているのではなかったか。

青山は、続けている。

「諸君は、職場サークルを知っておるか。サークルの人々、これがいかに立派な、生きた学問をしておるか。いかに、素朴なる学習を闘いとおるか。その大衆の底力に、我々は学ばね

ばならぬ。そのためにこそ、わが国文科もあるのだ。君らのようなものは、いっそ學問を止めて農村にいつてみるとよい。そうすれば、眞の國民の姿をつかみうるだろう。今、諸君が深刻に自己批判せぬ限り、眞の國民文學は生れてこぬ、と俺は思う！」

青山はいい終ると、音立てて回転椅子に腰をおろした。彼は、學生が坐らない教授用デスクの回転椅子に、腰かけるといふことに威圧を示し、腕組をしてそり返った。

發言を望む声と挙手が、大村静夫に向かつて上がった。彼は、席上を見まわしたが、すぐ左脇の佐藤峯子が、伏日で軽く手を上げているのを見ると、いった。

「佐藤さん。」

峯子が、話し出した。

「青山さんが今、私への批判から發展して、この近代文研一般に対する、攻撃をなさったのですが、私は、青山さんの主張に全く反対です。……」

だが佐藤峯子が話し出すと、静夫は司会の冷静な立場とはちがう、思わぬ感情に領されてゆくことを自覺した。僕は今日、ほんとうは司会なんかしたくなかったのだ。と彼は思った。もし委員でなかったとしたら、出てくる気さえしなかったかもしれない。何故なら、佐藤峯子へ

の嫉ましさのようなものが、僕の心を一杯にするからだ、と彼は思った。今、僕は佐藤に発言を許した。青山の批判に、彼女が、先ず答えることが妥当と判断したからであり、その思考そのものには、何の感情も入っていない。ところが、佐藤がアルトの声を響かせて早口に喋り、瞳を輝かせ、大勢の友人に取りまかれて頬を染めているということ、佐藤が水色の半袖セーターをきた、大柄な姿の全体を、友人たちの前にさらしているということが、僕に限りなく嫉ましいものを感じさせてしまったのだ。そうした感情が僕を苦しめるものだから、彼女の顔も見たくない時があるのだが。……噂によると、佐藤は国際派問題の捲き添えをくって、除名になったのだということだ。しかし彼女が党員であったなどと、信じることができないくらい、佐藤は倨傲で派手な娘だ。それでいて、時折、ふうっと暗い影のある表情を見せて、戸惑わされることがある。その不可解な未知のものに、僕は口惜しくも引きよせられているようだが。……

静夫は、峯子の話をききながら更に思い出した。一昨日の夕方、少しおそく、大学を出て国電の駅にいくと、プラットホームに佐藤が独りで立っていた。図書館の帰りだと彼女は聞いた。そこで話したことといえば、佐藤が鳥羽教授の推薦で『国文学研究』にのせるという、文献目録の仕事のことくらいであった。大学の国文学会誌に、学生のうちから発表の機会を与